

新年を迎えて

農林水産省消費・安全局植物防疫課長 しま だ かず ひこ
島 田 和 彦

2018年を迎え、皆様に新年のお慶びを申し上げます。植物防疫課における最近の動きと所感を申し上げ、新年の挨拶とさせていただきます。

2017年は、前年9月に開始したジャガイモシロシストセンチュウの緊急防除対策を継続実施してきました。また、昨年6月から沖縄県、鹿児島県下へのミカンコミバエ種群の飛来が確認され、石垣島では航空防除や住民による寄主植物の除去が精力的に行われました。結果として、同種群の定着は回避されましたが、9月には、長野県下でテンサイシストセンチュウが初確認され、現在は、緊急防除を視野にいたした対策を進めています。

農産物の輸出促進の取組としては、各国との間で植物検疫協議を進め、昨年9月に米国への日本産柿の輸出を解禁しました。また、輸出産地の掘り起こしや輸出量の拡大のため、植物検疫、農薬等の専門家による技術的支援を開始しました。

国内での病害虫防除においては、発生予察や病害虫防除指導基準の改善に向けた検討に着手しております。新年度においては、これら昨年着手した取組について軌道に乗せていく年であると考えますが、その年頭にあたり所感なりとも申し述べさせていただきます。

まず、ジャガイモシロシストセンチュウの緊急防除についてですが、北海道網走市での土壌調査の結果、約680haで発生が確認され、当該地域からの馬鈴薯などなす科作物や土壌の移動の禁止、対抗植物（ハリナスビ、野生のトマト）の植栽や土壌くん蒸剤の使用による根絶防除を進めています。

我が国未発生の病害虫の侵入は、発生地域の農業生産、地域経済に大きな問題を起こすものであり、国の莫大な防除予算の投下を求められます。

このため、今後は、重要病害虫の侵入やまん延を阻止する植物防疫の枠組みの構築に力点を置く必要があると考えます。新たな枠組みを検討するうえでは、植物防疫法の下で推進されてきた検疫対象の明示化（ポジティブリスト化）に沿った対策の充実が重要との印象を持っています。すなわち、輸入検疫においては、対象病害虫ごとに検疫措置を選択することや検査手法を開発することが重要だと思います。また、侵入警戒調査についても、諸外国での発生動向調査をもとに、病害虫危険度分析（PRA）を行い、調査対象、調査手法の枠組みを構築していくべきと考えます。もちろん、このような取組を進

めるうえでは国際植物防疫条約（IPPC）の国際基準（ISPM）に十分留意していくことが重要と考えます。

次に、国産農産物の輸出促進についてですが、現在、2016年5月に政府が策定した「農林水産業の輸出力強化戦略」に基づき、2019年の農林水産物・食品の輸出額目標1兆円の達成に向けて取組が進められています。植物検疫協議では青果物の輸出額250億円のさらなる拡大のため、昨年は各国との間で協議を進め、1月にはベトナムへの梨の輸出、9月には米国への柿の輸出を解禁しました。2017年の農林水産物輸出額は、貿易統計（速報）では5.4%増加（1～9月の対前年同月比）しましたが、青果物は4.3%減少となり、いわば、輸出拡大の踊り場のステージとなったと認識しています。

これからは、輸出を志向する産地の掘り起こしと既存産地の輸出量拡大や輸出品目追加のため、輸出環境の改善に向けきめ細かな対応が必要と考えます。検疫協議においては、新たな輸出品目の解禁のみならず、産地に有利な検疫条件の改善等の取組が必要であると考えます。例えば、ベトナム向けリングゴの袋掛け、欧州向け柚子の表面殺菌等の廃止の協議がそのようなものと認識します。また、専門家による輸出産地の技術支援も充実させていく必要があります。すなわち、輸出額拡大のため、輸出を推進する産地を鼓舞し、輸出相手国のニーズに合わせた輸出を行うマーケット・イン型の輸出産地に寄り添い、支援を行うことが重要と考えます。昨年4月に開始した輸出サポート事業の専門家が、よい意味で、“お節介をやく”事業を進めたいと考えます。

最後に、国内での病害虫防除においては、真に生産者に役立つ病害虫発生情報の提供と防除技術の刷新の観点から、関係者と相談を進めてきました。病害虫発生情報の提供では、広く地域の農業関係者からの情報提供を受ける仕組みと、病害虫防除所のプロの目を活かす発生予察システムの構築により、迅速かつ役に立つ情報の収集を目指します。また、防除技術の刷新のためには、農薬抵抗性、難防除病害・雑草等の対策を念頭に、研究機関の参画を求め、防除指導基準の検討を推進します。その際には、生産者の活用ニーズが高いドローンによる農薬散布の促進に向け制度整備を進めたいと考えます。

上述の課題を解決するためには、農業者、都道府県、植物防疫所および関係機関が連携することが重要と考えており、本年も、皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

For the New Year. By Kazuhiko SHIMADA